芥川賞全集

第四巻

文藝春秋

芥川賞全集　第四巻

著者　由起しげ子　小谷剛　井上靖　辻亮一　石川利光　安部公房　堀田善衛

昭和五十七年五月二十五日　第一刷

定価　一八〇〇円

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　理想社印刷所
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本
製函所　加藤製函

万一、落丁乱丁の場合はお取替え致します

Printed in Japan

目次

本の話　由起しげ子　5
確証　小谷剛　33
闘牛　井上靖　75
異邦人　辻亮一　127
春の草　石川利光　177
壁　安部公房　203
広場の孤独・漢奸　堀田善衛　285
選評　393
受賞者のことば　471
年譜　477

题　装
字　丁

中　粟
田　屋

功　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芥川賞全集

第四巻

本の話

由起しげ子

（第二十一回　昭和二十四年上半期）

「本の話」（昭和二十四年十月発行、文藝春秋新社刊）を底本とし、表記を新字体、現代仮名遣いに改めた。

一

私の義兄（あに）、白石淳之介はその年の二月一日、静かな晩、神戸市外のK病院の一室で五十八歳の生涯を閉じた。喉頭結核であった。病名は喉頭結核であったが、事実は栄養失調死であった。自ら自身の肉を削り血を涸（か）らしてずかずか死の方へ向って歩いて行くという死に方であった。戦災でそれ一着しかない、教壇に立つにも炊事をするにも買い出しに行くにもそれ以外に着るもののなかった草色の国民服をきて、胸のポケットから炊事用のマッチをのぞかせ、二つ折りにした夏ざぶとんを枕にして横たわっていた。

私は寝台の鉄棒に頭をおしつけ、時々遠くに水の走るような音をきいていた。病室の天井のテックスが二枚はがれ、鉛管が二本のぞいていて、水はそこを走るのかもしれなかった。

前々日、私が東京で受け取った白石からの電報というのはノドワルシ、クスリモツテキテクレ、という不思議な簡単なものだった。ノドワルシとは何のことかよく考えられなかったが、何をすてても行かなければならない局面に達したことだけは感じられた。それは九月に私は姉が悪いという知らせを受けていた。私はその時すぐにも行く筈であった。風水害の時、戦災の時、度々の病気の時、それまでにも何度かそういう知らせを受けて行かないことはなかった。しかし今度だけは事情がちがっていた。終戦以来の変り方によって経済の根拠を失っていたということだけでなくゆきつまった家庭生活の変革を実現する準備として私は小さい子供二人をつれ碑文谷（ひもんや）の友だちのアトリエを借りうけ新らしい生活を築こうとしている矢先であった。食べるもののない日もお金のない日も味わった。それは初めての経験で、私にはせい一ぱいの生き方だった。今こそ私もいたわられてもいいという気もちがあった。それに一方、姉の闘病についての専門家ぶりには私はかなりの信頼を持っていた。きっとまたこの病気もうまく切り抜けてくれるに

違いないというような心の手ごたえを感じ、その手ごたえに頼って一日のばしに関西行きをのばしていたというのが本当のところだった。だからノドワルシという電報はいきなり胸に来るものがあった。私はお勝手から家政婦の下駄を借りて駈け出し武石公子に電話をかけに行った。他に咄嗟に浮ばなかったからだ。公子にはひと言ですぐに通じた。電話口で考えているようだったが、一万円でいい、と云うのでそんなになくてもいいわ、と云ったが、その日のうちに手配をしてくれたと見えて、翌日の夜自分で切符と急行券とおかねを持って八重洲口に来てくれた。公子は日本橋の薬品会社の専務であったが、自身では昔からいつも貧乏していた。何か売ったんじゃないの、と訊くと、しょがない、あの小さい方のブラック売ったわ、と云って急にすこし惜しそうな顔をした。ピアノの上の壁にかけてあったその静物を、どんなに公子も私も気に入っていたかわからないのだ。私はその絵が剝がされた後の白い壁を思い泛べ、自分の胸から何か引き剝がされたような痛みを感じた。私は何だか涙が出て来そうなのでろくにお礼も云わず、丁度動き出した行列について歩き出し階段をかけ上ってしまった。

そのようにして義兄の臨終に間に合ったのだった。何か心に急ぐものをかんじてはいたが臨終に間に合うというようなことは頭の隅っこにもなかったし、病人は姉だとばかり思っていた私には、その姉を看護していた義兄が重態に陥っているなどとは考えも及ばなかった。私は呆然としてしまった。二人は病んだ老鳥のように横わっていた。

私がそばに寄って行くと義兄はびっくりするような細い手を出して私の手を握り、じっと眼を見開いて何か云おうとした。声は出ず、その手に籠められた異常な力と、大きく見開かれた眼球が義兄の意志を伝えていた。

「おそかった——もうだめ——どうして早く、来てくれなかった……」

奥の方で鳴っている、小さな音だった。こんなになるまで、一度も来てほしい、と云っては来なかったのだ。云わなくても来ると信じていたのだ。瞬間、私は何十年もの間、私たちの間柄が信頼によって結ばれて来たことを確認し、最後の瞬間に私がそれに背いたことを知った。

あまりのむざんさに、哀しみより憤ろしさでいっぱいになり声も出なかった。

義兄は手の力を抜き、眼をとじ、ききとれないくらい低く、

「いや、——もういや。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と呟いた。ああこの一ことを言うために義兄は私を待っていたのだと思えるくらい、それは重たく、哀切な響きを持っていた。私以外の誰に彼はそれを云うことが出来たろうか。急に、噴き出すように涙が出て来、喰いしばった歯の間から声がもれた。

義兄が何か云っている。

「勉強しているの……」

私は子供のように素直にそれにうなずくことが出来た。それから顔を拭いて私もお金に困っていたこと、今度の家につれて来ている小さい子供がジフテリヤで入院したりしたことを話した。彼はよしよし分ったというような顔になり、

「可哀そうに——」

と云った。私が貪るように義兄の顔に見入っていると、一こと二ことはき棄てるように、

「学問だけ出来ても何にもならん。」

と云った。私が驚いて見ていると、もう一度また先程の大きなキラキラ光る眼になり、

「毎日リンゴを七十円、さしみを××円、優子に毎日白身の魚をたべさせた、便器が二百円……」

と云った。それも私にだけきいておいて貰いたいことなのだった。それから彼は眼を閉じ発作のためもう一度眼を開いた時にはもう言葉を云うことが出来ず、そのまま決して醒めることのない眠りについてしまったのだった。医者も看護婦も間に合わなかった。

家政婦をひきとらせ、夜が明けるまで亡骸を守った。

ねずみが多分毎夜の仕事なのだろう、枕もとの台の上に現れて米の袋をねらう。鹿のように首の長いねずみを、私は衛兵のように追い払った。

夜が明けると義兄を慕っていた学生たちが来た。レスリング部の大きな六尺近い学生が顔を赤く泣きはらして屍体の処置されたあとの衣類や身のまわりのものを始末していた。可愛い息子のようであった。その学生の口から義兄のサン・ジュリアン・ロスピタリエのような半歳の苦しみの道が語られた。九月、姉があばら骨が一本一本かぞえられるようになった時、「よし僕の肉をとってつけてやろう」と云って毎日リンゴ、さしみ、果汁、新らしい雞卵など姉の口に合う栄養物と云えば何処までででも行って買い求めて来た。三千円にたりない大学教授の給料では彼自身に残されたものと云っては配給の粉と藷よりほか何もある筈はなく、義兄は誰の眼にもはっきり分るほど急速に瘠せ細り、衰えて行った。それでも人手を雇わず、学校の講義は十一

月末迄一度も休まずに続け、教壇でたおれそうになり強制的に病妻と同じこのK療養所に収容されるまで、学生同僚の救援を固辞し、親戚知人にも語らなかったのである。義兄の死の枕もとにあった白い美しい米粒は彼が病妻のために残したもので、最後まで彼自身の養いとすることを拒んだものであった。

K療養所は松林をきり開いて山の上に建てられていた。義兄の柩が療養所を出るとき、激しい霰がふりはじめ、展望をかき消し、私の髪の毛や襟巻にも白くとまった。その白さを見ているうち私はふと足許があやしいなと感じ、急にあたりのものが一せいに遠のいて行くような気がした。学生がすぐ寄って来て両脇から私を支え、自動車のところまで運んでくれた。

二

私の前にただ一つの、不思議な、苦しい道が開けていた。

私は姉の寝台のそばで日夜、肉親というものについて、生命について、生命への執着について、愛情について考え耽った。

姉の生命はつづいている。それ以上細くなりもしなければ太くなりもしない命の道を、ゆっくりと歩みつづけているようにみえる。それは私の心づかいと家政婦がいろいろな栄養物を拵えてくれることによってささえられている。蓮根、リンゴ、大根、にんにく其他を食事ごとにおろしがねでおろし、布巾で絞り、黒焼にして卵の黄身を与え、新らしいさしみ、ほうれん草、その他幾皿もの副食物をつくり、二合の牛乳、七個のみかん、クリーム菓子、もなか等をたべさせることによってそれは持ちこたえられている。

こうして有金を使い果し、売れるものを売りつくす間、姉は生きていてくれるであろう。義兄が自らの躰を削って姉を看護し斃れた道を私も同じように歩き、斃れればよいのかもしれない。しかし私がすべてのものを売りつくしてみすぼらしく姉の傍で第二の犠牲者となった時、一たい誰がこの悲惨な運命の後継者となって、姉を看とりつづけるであろうか。姉、この姉をもう私以外に一人でも愛しているものがあるであろうか。その私の愛情でさえも少女時代の仲のよかった思い出となつかしい母を共有した肉親の故であって、或時期以後の姉の生活態度にはすこしも同感することが出来なかったではないか。自身の療養のスケジュールの完璧さを少しも崩すことなく現在の良人のそのような骨身を削る苦闘に変貌して行くさまを見ていることが出

来たということに、私は恐怖をかんずる。姉に与えるばかりで自分は何一つ与えられることなく死んでいった義兄を思うとき、私は市中をかけずりまわって高価なびんづめやかんづめを姉の枕もとへ運ぶ自分に恐ろしさをかんずる。姉がそれを求め――且て義兄に求めたであろうように求めれば、私はいくらでも運ぶであろう。ただその時でも姉が自分から求めるのでなく、私の心づかいから探すのであったら、どんなによかったろう、と思うのだ。与えるという精神を忘却した人の姿ほど哀れなものはない。私の家の子供たちの一人もこの姉には懐かず、義母も、義兄の姉妹も、この姉を憎んでいるのだ。それはローソクの灯を人のそれにうつすように愛情の灯を人の心に灯さなかった生涯の果てではなかろうか。

このような哀しい姉を私はどうしても見すてることは出来ないのだった。その一日も永く生きのびたいと思う心に添わずにはいられないのだった。このような生涯はあまりにも悲惨すぎる。このままで死なせたくない。――肉親というものの不思議さであった。不思議な妄執のようなものであった。姉の食事のすむ日は私も心に張り合いがあり、姉の食慾が衰えると私も食物が喉を通らないような気がするのだった。

私の心は三つにも四つにも分れ、暖流と寒流のように交錯した。義兄のあの眼球にはりつくほど落ち窪んだ瞼やいたましい頬、それから、胸。姉はあの生々しい思い出とどのようなつながりでまた刺身をたべクリームをなめるのだろうか。私自身がそれを一箸、一さじ口もとへ運んですすめながら、心は若しさでいっぱいになって行った。そしてまた、弱々しく病み呆けて一寸した衝撃にも潰れてしまいそうな姉にこうした嫌悪をひそかに抱く自分のきびしさをこわいものに思った。羽根をむしられた鳥のように、子供もなく五十をすぎて孤独となった、空ろな肺と脆い精神よりほかに何一つもたぬ病人に対して、このような批判を加える自分が、人間の身分をとび越えた思い上ったもののように思えて哀しかった。

要するに姉の闘病は続いていた。つづいている間、それはつづけなければならないものであったし、そのためにすべてのことが賭けられなければならない性質を私にとってそれは持っていた。療養所の庭の四五寸伸びた麦畑に寒い冬の風が吹いているのを見ながら、私はお金のことを考えていた。義兄とはちがった道はないものか、と考えた。たしかに、この世の中にはお金を儲けている人達がある筈だ。それはどうしても私に出来ないことだろうか。月に二万円

の収入を得て初めて療養生活は確保されるので、しかもこの必要は三年も五年もつづくかもしれないのだった。

二月七日、校葬のため参集した且ての義兄の教え子のなかに出て来た蜂須賀五郎兵衛という文字通り童顔純情の偉丈夫がいた。式後、山をのぼって療養所を見舞い、涙にくれ、男泣きに泣き、私を物蔭に呼んで、大きい紙袋とお金の束を出し栄養をとらせてあげて下さい、この品は僕のところで作っているものです、と云った。お金は三千円、包みの中はだしじゃこで二貫目ほどあった。——

卒然として私はこのだしじゃこのことを思い泛べた。だしじゃこを蜂須賀さんから仕入れて売るとしたらどんなものだろう、と思いついた。この考えは大変な飛躍であったが哀しい気もちはしなかった。だしじゃこについて考えを纏めて行くうちにだんだん勇気さえ出て来た。

だしじゃこは愛媛県の産物で非常に上質であった。消耗品で必要品に近く、量も大小売り易いものであるから値段さえ適当であればつづけて売ることが出来るのではないか、と思った。店など拵えないで、持ちまわって売るのだ。殆んどどんな家庭へもすすめられる。まず仙貨紙で大小の袋をはり（お隣りの学習院へ通っている子供たちを動員する）家の子供たちに木版を刷らせ、五郎兵衛じゃことでも書き、のしを赤で右肩に押し、五十円百円の包みを拵え、市販の同類品の目方を参照して中身を入れる。純益二割位は確保できるであろう。十万円売れば二万円出来るわけだ。食品会社をやっているMさんや社会事業家のKさんも相談にのってくれるに違いないと思った。それから武石公子と棟方利一にはどうしても中心になって働いて貰わなければならないと思った。私は東京の友だちや知り人の顔を一人ずつ思い泛べた。誰も彼も貴族的な構えを持っていて、だしじゃことの対照は奇妙であったが、誰でも一袋や二袋買ってくれないことはないような気がした。軽蔑する人もあるかもしれないが、私がこうしなければならないわけを知ってくれれば皆賛成してくれそうに思えた。いよいよいけなければ有楽町の橋の上で売ってもよいのだし、これは碑文谷の家に来る家政婦の北島さんが上手らしい。

次々と色んな場面を考え、難関やそれに打ち克って行く道を考えていると、こんなすばらしいことはないような気がして来た。だしじゃこ。これはたしかに私の書く童話より味があって、人にもすすめられる有力なものであった。

私は蜂須賀五郎兵衛に手紙を書き、それから武石公子と棟方利一に手紙を書いた。三通の手紙をコオトの袂へ入れて松林の道を抜けて四十分かかるS川の郵便局まで速達を

出しに行った。雪や霰が降る中を何度も歩いたこの道も、今日は春が来たような暖かさで、空の色や麦畑を煖らせている美しい陽の色を見ていると何処かに楽しいことでもありそうな浮々した気もちになった。私は棟方利一のことを考え、利一とでもこの道を一緒に歩いていたらどんなにいいだろうと思い、利一と二た月会わないことを思い不意に涙ぐみそうになった。利一にこれで三度も手紙を書くのだが一通も返事が来ない。利一から頼まれた童話を書かないから怒っているのではあるまいか。棟方利一とは去年の夏彼が私のところへ五枚の童話を頼みに来たときからつき合っている。彼は彼の云い方によると、東京で一番小さい子供雑誌の一番下っ端の記者、だった。それでも去年の夏から三篇私の童話をのせてくれた。夏も冬も同じ一枚の外套をブワブワ着て歩いている。あれはきっと東京で一番きたない編集者なのだろう。今度関西へ来ていろいろな青年に会ったが利一のような人には一人も会わなかった。関西という土地は美しく、何か特別に活動的なものを持っているが、不思議に心にふれてくるもののないところなのだ。人はみな、私に親切で愛想よくしてくれるが、例えば利一のように深いところで心に触れてくるようなものが全くない。私はここへ来てだんだん孤独である自分に気づき、利一を渇望している自分をかんじた。それは、危険なくらいであった。三四日前のこと、利一に約束した童話があるので、私は狼の話を書いた。それは、姉のいるK療養所の第四病棟は遠く、松林の丘に孤立していて、下界から全く逸脱した感じが好きだったが、そこに狼が出るという話は申分なく私を惹きつけた。私は子供の頃読んだ虎や熊の生活、カンガルーの生活を思い出し、人間のために次第に棲む場所をせばめられてゆく狼どもの心持がよく分るような気がし、女のジャーナリストが一ぴきの狐に変身して狼とインタービュウする話を書いたのだった。ところがその狼の話し方が全く利一の口調に同じになってしまったので、私は顔が赤くなるような気持で破いてしまったのだった。

私は郵便局に行き手紙は一通だけ出し、公子と利一の分は出さなかった。一度東京へ帰ろう、だしじゃこのことも会って話さなければ駄目だと思った。それに東京にいて時々顔を合わせてさえいれば何でもないのに、こんなところに来てまるで恋人のことをでも考えるように利一のことを考えているなんて、莫迦げているし無意味なことだ、と思った。

その夜私は姉が寝入ったすきを窺い療養所を抜け出した。あにが勤めていた学校の庭にミモザが咲いていたことを思

い出し、それを盗みに行こうと思ったのだ。山裾の畑道を学校の方へ歩いて行くと黒々と海をふちどったN市の燈火が火の粉を散らしたように見えた。裏門から校庭へ入って行くとユーカリやさわらや檜などが枝をさし交して星空を遮り、まっくらで何も見えなかった。私は手さぐりで一本一本下枝をさぐり、柔い群花の手ざわりや匂いをさがしたがもすこし粗くて痛い葉を何度かつかまねばならなかった。だがとうとうその粗い葉の小枝の中にかくれているカナリヤの胸毛のようなミモザの花をつかまえた。顔をもってゆくとつつまれるような懐しい匂いが胸をひたした。恰度この季節、南仏リヴェラの野山一めんにむせる程の香りを漂わせて咲いていたこの花は、今の私にはすべての懐しいものの身代りのように思えた。私がきれいな一本の枝を手ぐりよせようと爪先きだった時だった。足許から私を驚かせて何かがバサッと飛びたった。不安げな羽搏きは眼の見えない夜鳥であった。

私は一本のミモザの枝をかかえ、二十九年義兄の精魂がそこにあった美しい校庭に別れをつげた。

ミモザは病室の片隅の瀬戸の水差しにさして東京に帰った。

三

だしじゃこの話はしかし簡単なことでけりがついてしまった。蜂須賀五郎兵衛から返事が来て、だしじゃこが統制品であることが分ったからである。蜂須賀五郎兵衛はその代りに寒天の販売をすすめて来たので、私はそのためにもう一度関西まで出向いて行ったが、それも簡単な故障のために挫折してしまった。しかしこの時私は大阪で河辺興次という人物に会った。

寒天の用件で私がある事務所に一人で腰かけて人を待っていると、色のおそろしく黒い、精力的な感じのする男の人が入って来た。この人はよく見ると何処か子供っぽいような顔もしていて、どういうつもりか胸にもも色のスイートピーを挿していた。これが河辺興次という風変りな実業家で、義兄の昔の教え子であった。義兄が亡くなったことはもう知っていて鄭重なくやみを述べてから、私が寒天の話をするのをニコニコしながら聞いていた。そして「奥さんのような方が商売をなさろうというのは、小さい子供が溝のふちを歩いているようで危なくて見ていられない」ということを、せい一ぱい言葉に気をつけるようにして言っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com